

居場所感のなさとは自己肯定感情の関係

The Relationship between the Loss of the Position of their Own, and the Self-Affirmation

甲村和三[†], 飯田沙依亜^{††}
Kazumi Kohmura, Saea Iida

Abstract Failure to adapt to the new environment causes the loss of the fit in the place. When we cannot overcome the failure or avoid a repeat of the failure, the loss of “the position of their own” is experienced as one of the trait feelings. In this study, the relationship between this feeling and the self-affirmation was examined. As results, we showed that one of the self-affirmation, “feeling of inferiority” plays a significant role in the relationship between these two factors.

1. はじめに

「居場所」とは、人のいる空間的な意味での場所である。それを心の拠り所、あるいは占有感の感じられる場所、存在を実感できる場所、といった心理的意味で、「相応しいところに、自分らしくいられるという実感」をここでは「居場所感」と称することにする。「居場所感」は日常的概念の印象が強いが、既往研究も既にいくつか認められることから、本研究でもこのような定義を持つ構成概念として用いることにする。

甲村・飯田^{1)・2)}はこれまでに既に大学生を対象として彼らの居場所に関する研究を進めてきている。一般に居場所感の研究においては、「居場所感がある」とする事態の感情分析より、「居場所感がない」とする事態での感情分析の方が回答者には直截的で、回答しやすい。われわれの研究では、大学生のキャンパスライフへの適応を基本課題として、大学生の居場所感のなさを感じた日常体験について探究してきた。例えば、甲村・飯田¹⁾は自由記述法により大学生活における居場所感の経験の有無を問うとともに、大学生活のどういう状況で「居場所感を感じるか」を思いつく限り自由に記述してもらった。これらを「ヒト」「モノ」「コト」に区分して項目を分類した。ヒトにおいては友人関係、モノにおいては教室状況、コトにおいてはクラブ・サークル活動に関わる事項が居場所感を感じる経験との関わりで列記されていた。

とりわけキャンパスライフの居場所感規定要因として「友人関係」に関する項目出現頻度が高かった。一方、甲村・飯田²⁾の家庭生活における「居場所感」を感じる事態では、「家族」「食事」「家庭内での役割」に関わる内容項目が多く見られた。

一方、「居場所感のなさ」の感情分析等については飯田・甲村・舟橋・長谷川・竹澤・幡垣³⁾において試みている。ここでは、居場所感のなさの体験の有無、居場所感の形成との関わりを吟味するために自分の性格や行動特徴についての評定、大学における活動(通学、講義受講、クラブ活動)への習熟の様子、大学生がよく経験すると思われる「居場所感のない状況(2つ)」での対処行動などが質問紙により調べた。この中で、性格や行動特徴の自己評価と居場所感のなさの感情傾向の関わりについては20の質問項目に対して5段階で評定させ、得られたデータについて主因子法による因子分析(固有値1.0を基準にpromax回転)を行った結果、「緊張」「神経質」「小心」「気分変易」「短気」「自己中心」傾向の6因子を抽出した。また、「居場所感のなさを経験した際の感情については15項目を用意し、同様に評定させ、得られたデータについて主因子法による因子分析(固有値1.0を基準にpromax回転)を行った結果、「不要感」「孤独感」「居心地の悪さ」「違和感」「緊張感」と名づけた5因子を抽出した。各因子にはそれぞれ3項目が含まれていた。この因子分析による因子得点を指標に、前述の性格や行動特徴について回答者を「肯定的評価群(評定段階5, 4点)」と「否定的評価群(評定段階2, 1点)」とに分けて「居場所感のなさ」感情の平均因子得点を比較した。その結果、性格・行動評価の「神経質(ちょっとしたことで気分が滅入りやすい)」、「短気(気が短い、

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター (豊田市)

^{††} 日本学術振興会/名古屋大学発達心理精神科学教育
研究センター (名古屋市)

待たされるとイライラする)、「自己中心的」などの項目の肯定的回答者群に、居場所感のなさの感情(不要感・居心地の悪さ・緊張感など)を感じやすい傾向が認められた。

これらの得られた居場所感のなさ感情を通覧すると、多くの学生が示した居場所のなさ感情の多くが、事態に即した一過的感情(状態依存的感情 state dependent)であって、どこでも、いつもそういう感情になりやすいとするようないわゆる常態的(特性依存的 traits dependent)感情とは区別されるように思われる。しかし、本人の自覚による日常性格や行動特徴との密接な関わりを見ると、遭遇する各種の場面において居場所感のなさを感じやすい性格や行動上の個人傾向があることを窺わせるものであった。

そこで、本研究ではとりわけ深刻な常態的(特性依存的)居場所感のなさに着目して、主に自己肯定感との関わりについて検討することにした。自己肯定感とは、文字通り自分を肯定的に捉える感情であり、自分で自分のことを価値あるもの、かけがいのない存在と評価している感情であるが、必ずしもその裏づけがあるわけではない。ただ、自分で自分の有用性を認めていることが特徴であり、自己肯定感が高い人は居場所感のなさを常態的に感じにくい人と考えられる。居場所感研究においては、調査項目の中で自己肯定感情との関わりを示すような既往研究はいくつか認められるが、多くは居場所感の研究、自己肯定感の研究と独立的に扱われることが多く、直截的に両者の関係を追究した報告はむしろ少ないように思われる。このようなことから、われわれが対象としている大学生のキャンパスライフにおける適応の問題を大学生の自己評価(肯定感情)の視点で検討することが本研究の主要な目的である。

2. 方法

調査対象者: 愛知県内の私立大学生を対象に調査を実施した。有効回答者は 373 名で、学年ごとに集計すると 1 年生 120 名 (32.2%)、2 年生 98 名 (26.3%)、3 年生 115 名 (30.8%)、4 年生 40 名 (10.7%) であった。性別については男性 330 名、女性が 40 名、不明者が 3 名であった。
調査実施時期・方法: 平成 24 年 11 月から 12 月にかけて授業終了後の時間を利用して協力を呼びかけ、一斉に実施した。調査への協力は自由であり、参加しないことで不利益が生じないことは十分に説明された。

質問紙の構成: 調査項目は、① 居場所感のなさの体験の有無、② 居場所感のなさ尺度、自己肯定感に関わる既存の尺度から本研究に関わりが深いと考えられる項目を集めて新たに構成された③ 自己肯定感情尺度であった。自己肯定感尺度は「自分のことが好きだ」等(詳細は表 1 参照)の全 30 項目から構成され、5 件法で評価された。

3. 結果

「居場所感のなさ」の経験の有無

居場所感のなさを経験したことが「ある」と回答した者は 373 名中 108 名 (29.0%)、「ない」と回答とした者は 265 名 (71.0%) であった。

居場所感のなさ尺度と自己肯定感情尺度の因子分析結果

それぞれスクリープロットを参考に居場所感のなさ尺度は 3 因子(表 1 参照; 主因子法・promax 回転)、自己肯定感情尺度は 5 因子(表 2 参照; 主因子法・promax 回転)を抽出した。それぞれの因子の信頼性係数については居場所のなさ尺度は、孤独感 ($\alpha=.763$)、不要感 ($\alpha=.661$)、違和感 ($\alpha=.641$) であった。自己肯定感情尺度は、自己肯定感 ($\alpha=.772$)、大学満足感 ($\alpha=.733$)、対人的緊張 ($\alpha=.709$)、将来願望 ($\alpha=.713$)、劣位感情 ($\alpha=.559$) であった。

表 1. 居場所のなさ尺度の因子分析結果 (promax 回転後)

質問項目	因子			共通性
	孤独感	不要感	違和感	
Q17 悲しい感じ	.679	.233	.433	.497
Q10 周りで誰かが話しかけてくれるのを切望した	.639	.436	.008	.523
Q13 その場から早く逃げ出したい感じ	.595	.408	.409	.404
Q19 周囲の人の目が気になる	.593	.442	.311	.391
Q16 過度な緊張感	.490	.289	.218	.245
Q15 頭が真っ白で何も考えられなかった	.446	.401	.232	.249
Q11 孤独な感じ	.414	.091	.276	.199
Q13 自分が必要とされていない感じ	.324	.857	.210	.742
Q18 周囲の人に無視をされている感じ	.342	.546	.079	.319
Q12 心細い感じ	.464	.510	.249	.328
Q14 何をしたらよいかわからない感じ	.211	.394	.384	.248
Q14 帰らない感じ	.305	.151	.561	.438
Q12 居たたまれない感じ	.543	.157	.563	.449
Q111 自分がここに居るのが不思議な感じ	.304	.459	.553	.419
Q115 いつも自分のとは違う感じ	.265	.126	.518	.270
抽出後の負荷平方和(分散の%)	26.101	7.048	4.988	
抽出後の負荷平方和(累積%)	26.101	33.149	38.137	

表 2. 自己肯定感情尺度の因子分析結果 (promax 回転後)

項目	因子					共通性
	自己肯定感	大学満足感	対人的緊張感	将来願望	劣位感情	
Q31 自分のことが好きだ	.767	.342	.399	.305	-.240	.600
Q32 自分を価値ある存在だと思う	.742	.288	.425	.532	-.123	.631
Q30 自分の存在は何物にも代えがたい	.635	.304	.428	.317	-.098	.414
Q39 自分の容姿が気に入っている	.623	.317	.317	.248	-.251	.410
Q322 自分は伸び伸びと生きている	.518	.367	.411	.191	-.195	.310
Q38 自分の意見が認められると優越感を感じる	.431	.104	.169	.100	.105	.235
Q34 自分は両親に大事の育てられたと思う	.323	.274	.170	-.043	-.004	.163
Q39 大学生生活に満足している	.352	.627	.304	.284	.023	.442
Q23 自分一人ぼっちではない	.513	.588	.410	.259	-.195	.427
Q326 人間関係をわざわざしなく思う	-.209	-.538	-.221	-.189	-.278	.336
Q311 大学入学後、親友と呼べる友だちができた	.283	.523	.265	.171	.010	.289
Q324 友だちと一緒でも何となく寂しい感じになる	-.216	-.497	-.161	-.108	.339	.320
Q329 自分は他人をあまり信用していない	-.167	-.471	-.083	.004	.226	.270
Q30 大学に違うことがイヤになることがある	-.155	-.444	-.132	-.288	.175	.272
Q319 友だちの成功を羨望に感じることが出来る	.236	.378	.328	.163	.163	.247
Q36 辛いことがあっても前向きな考えができる	.514	.344	.590	.372	-.214	.506
Q35 失敗があっても前向きな考えができる	.496	.333	.639	.156	-.341	.509
Q315 先生や仲間からあれこれ指摘されても平気だ	.273	.156	.626	.409	-.161	.442
Q314 大学の先生とも特に緊張しない話せる	.241	.147	.587	.303	-.106	.369
Q312 異性の友だちができた	.312	.241	.435	.274	-.177	.210
Q313 親と話すときも特に緊張しない	.266	.394	.407	.016	.097	.299
Q328 夢に向かってよく努力している	.289	.204	.341	.723	-.051	.531
Q321 本当は何をやりたいかわかっていない	-.305	-.322	-.344	-.617	-.237	.432
Q317 母をきかずに人の役に立つ自信がある	.503	.194	.468	.593	-.026	.472
Q310 大学卒業後の進路は大体決めている	.265	.223	.330	.495	.029	.286
Q325 周囲が自分さう思っているか気になる	-.065	-.099	-.213	-.216	.621	.428
Q327 自分は周りの人に気を遣いすぎる	-.024	-.140	-.106	-.079	.505	.298
Q318 自分は劣等感が強い方だ	-.329	-.264	-.222	-.120	.493	.309
Q16 何事につけて失敗を恐れる方だ	-.282	-.143	-.429	-.328	.475	.367
Q320 自分は挫折経験が多い方だ	-.102	-.044	-.076	.082	.267	.121
負荷量平方和(分散の%)	20.116	5.231	4.467	3.884	2.791	
負荷量平方和(累積%)	20.116	25.347	29.814	33.698	36.489	

居場所感のなさとは自己肯定感情の関係

居場所感のなさとは自己肯定感情の関係①

居場所感のなさ尺度について抽出された3因子、自己肯定感情尺度での5因子の因子得点を用いて、因子間の相関係数を求めた。その結果、有意な相関関係を複数の因子間に認めることが出来た(表3参照)。特に「劣位感情」因子は全ての因子と有意な相関関係を示していた。

表3. 居場所感のなさとは自己肯定感情の相関表

	自己肯定感	大学満足感	対人的緊張感	将来展望	劣位感情	孤独感	不要感	違和感
自己肯定感	1	.551**	.658**	.487**	-.251**	-.050	-.329**	-.178
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)		.000	.000	.000	.000	.621	.001	.076
N	362	362	362	362	362	100	100	100
大学満足感	.551**	1	.502**	.309**	-.256**	-.142	-.251**	-.200*
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.000		.000	.000	.000	.159	.012	.046
N	362	362	362	362	362	100	100	100
対人的緊張感	.658**	.502**	1	.551**	-.285**	-.218*	-.355**	-.108
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.000	.000		.000	.000	.029	.000	.286
N	362	362	362	362	362	100	100	100
将来展望	.487**	.309**	.551**	1	-.186**	.002	-.160	-.080
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.000	.000	.000		.000	.987	.113	.430
N	362	362	362	362	362	100	100	100
劣位感情	-.251**	-.256**	-.285**	-.186**	1	.334**	.418**	.267**
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.000	.000	.000	.000		.001	.000	.007
N	362	362	362	362	362	100	100	100
孤独感	-.050	-.142	-.218*	.002	.334**	1	.548**	.543**
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.621	.159	.029	.987	.001		.000	.000
N	100	100	100	100	100	104	104	104
不要感	-.329**	-.251**	-.355**	-.160	.418**	.548**	1	.329**
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.001	.012	.000	.113	.000	.000		.001
N	100	100	100	100	100	104	104	104
違和感	-.178	-.200*	-.108	-.080	.267**	.543**	.329**	1
Pearsonの相関係数								
有意確率(両側)	.076	.046	.286	.430	.007	.000	.001	
N	100	100	100	100	104	104	104	104

**、相関係数は1%水準で有意(両側)です。
*、相関係数は5%水準で有意(両側)です。

居場所感のなさとは自己肯定感情の関係②

居場所感のなさの経験の有無による自己肯定感情への影響を検討するため、自己肯定感情尺度から抽出された5因子についてそれぞれ対応のないt検定を行った。その結果、いずれの因子得点においても1%水準で有意な差が確認された。いずれの因子得点においても、居場所感のなさを経験していると、ネガティブな方向に影響していることが示された。

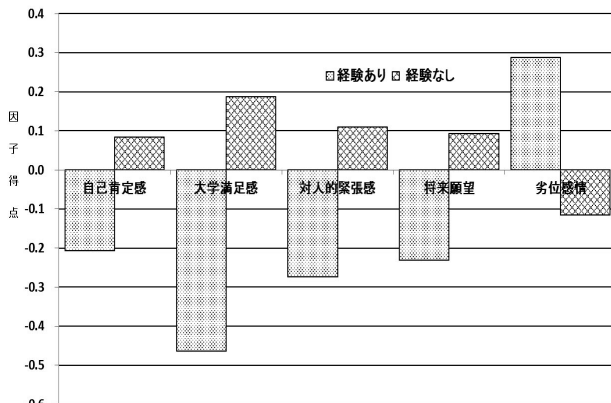


図1. 居場所感のなさ経験の有無による平均因子得点の違い

居場所感のなさとは自己肯定感情の関係③

居場所感のなさが自己肯定感情に及ぼす影響を検討するため、パス解析を行った。まず、居場所感のなさ尺度の3つの因子すべてが、自己肯定感情に影響を及ぼすことを仮定して分析を行った。有意ではなかったパスを削除し、得られた最終的なモデルを図2に示す。適合度指標は、 $\chi^2(10)=11.605$, $p=.312$, RMSEA=.021, NFI=.973, CFI=.996であった。孤独感と不要感が劣位感情に正の有意なパスを示しており、劣位感情から対人的緊張への正の有意なパスが引かれ、自己肯定感情尺度の他の因子へそれぞれ有意なパスが引かれた。

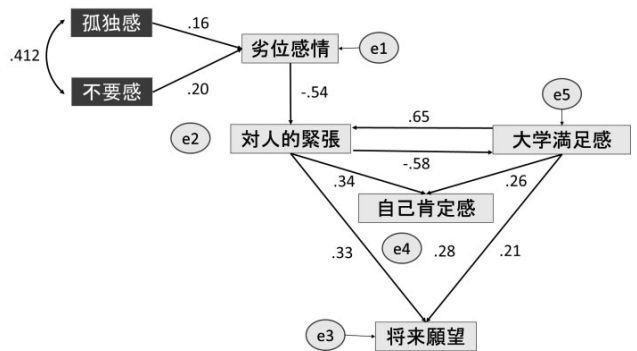


図2. 居場所感のなさから自己肯定感情に向けたパス解析の結果

居場所感のなさとは自己肯定感情の関係④

自己肯定感情が居場所感のなさへ及ぼす影響を検討するため、パス解析を行った。まず、自己肯定感情尺度の5因子すべてが居場所感のなさへ影響を及ぼすことを仮定して分析を行った。有意ではなかったパスを削除し、得られた最終的なモデルを図3に示す。適合度指標は、 $\chi^2(4)=5.69$, $p=.223$, RMSEA=.034, NFI=.949, CFI=.983であった。劣位感情が不要感や孤独感に有意な正のパスを示しており、大学満足感が不要感に有意な負のパスを引いていた。居場所感尺度の3因子については不要感から孤独感、違和感への有意な正のパスが引かれた。

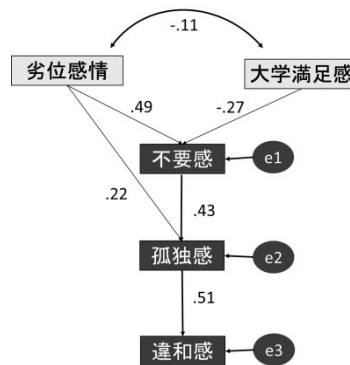


図3. 自己肯定感情から居場所感のなさに向けたパス解析の結果

4. 考察

本研究では大学生のキャンパスライフにおける適応の問題を大学生の自己評価（肯定感情）の視点で検討するべく、居場所感のなさや自己肯定感情との関係を直接的に検討した。この結果、居場所感のなさや自己肯定感情との間には居場所感のなさが高いほど自己肯定感情が低くなると言った負の関係があることが示された。また両者の関係を考える上で特に自己肯定感情のうち、劣位感情が重要な役割を示していることが示唆された。

青年期における適応感情や自己肯定感情に対する劣位感情の重要性はこれまでも間接的には示唆されている。例えば返田⁴⁾は青年期では他の時期と比べ劣等感が強まることを示しており、この傾向が青年期における交友関係や自己形成に大きな影響を及ぼす可能性について言及している。青年期に劣等感が強まる背景としては、安塚⁵⁾が青年期における、一方では孤独をもとめ他方では仲間を求めるといった両極端の間を微妙に揺れ動く複雑さからくる不安定さや、自我の目覚めにより高い理想自己を掲げることによって繰り返される失敗経験、他人を意識し比較することによる自己嫌悪をあげ、青年期は劣等感の悪循環に陥りやすい特徴があることを示唆している。本研究において大学生における居場所感のなさや自己肯定感情の関係を考える上で劣位感情が中心的な役割を果たしたことはこれらの先行研究の知見とも符合する。大学生にとって大学という新しい環境に適応し、人間関係を再編していく過程は劣位感情と如何に上手く付き合っていくか、しいてはこれまでの失敗経験をどのように乗り越え、自己実現を果たしていくかという課題にも同時に取り組んでいることを示唆している。これまでの居場所研究は居場所のなさがその時点での精神的健康に及ぼす影響を強く意識し、問題視する傾向が強かった。今後はより広い視点で居場所のなさの問題をどのように捉え、克服していくのかを考えていく必要があるだろう。

本研究で居場所感のなさを経験したことが「ある」と回答したものは全体のわずか3割ほどにとどまった。こ

れは居場所感のなさを経験したことがあるものが実際に全体のわずか3割ほどしかいないことを示している可能性も否定はできない。しかし、これまでの筆者らの調査における同様の比率から考えても、この割合はきわめて少ない。おそらくは居場所感のなさを経験が「ない」と回答することによって、以後の質問項目にはほとんど回答する必要がなくなる特徴を今回調査に用いた質問紙がもっていたことによる弊害ではないかと考える。すなわち授業終了後、速やかに帰りたい思いによって多くの学生が「ない」と回答した可能性が強く考えられる。このことから本研究で得られた知見がかなり偏ったものである可能性は否めない。

今後はこれらの問題点も踏まえ、今回得られた結果の再現性等についても慎重に検討すると同時に、居場所感のなさについてより理解を深めるべく、居場所感のなさや関連の深い概念との関係を検討するだけでなく、その形成過程や克服過程等その時系列的な変化も視野に入れた検討が必要だと考えられる。

5. 参考文献

- 1) 甲村和三・飯田沙依亜 大学生生活において居心地の良さを感じる要因-大学生を対象とした自由記述法を用いて- 愛知工業大学研究報告, 47, 133-137. 2012.
- 2) 甲村和三・飯田沙依亜 家庭生活において居心地の良さを感じる要因 -大学生を対象とした自由記述法を用いて- 愛知工業大学研究報告, 48, 85-91. 2013.
- 3) 飯田沙依亜・甲村和三・舟橋厚・長谷川桜子・竹澤大史・幡垣加恵 大学生の居場所に関する研究 -居場所のなさに着目して- 愛知工業大学研究報告, 46, 49-55. 2011
- 4) 返田健 青年期の心理学 教育出版. 1986.
- 5) 安塚俊行 劣等感の構造 (1) -予備的研究-幾徳工業大学研究報告, 6, 15-19, 1982.

(受理 平成 26 年 3 月 19 日)